

十二月総評 立花開

流木に火を灯す

海は運ばれて

同期していく妬みと痛み

まちりこ 埼玉県

運ばれてゆくのは「流木」ではなく「海」だった。流木が運ばれていくなれば理の中に自然に在るものだが、運ばれる海とは、不思議だ。海水だけではなく、そこには時間や感覚までも混ざりこんでいる。その先で妬みも拾われ、混ざってゆく。

眼科医にそばの花だと見抜かれる

松下 誠一 東京都

見つめられては、逃げられない。今まで、隠れて穏やかに暮らしてきたのに、一瞬のゆるみですべてを覆ってしまった。「私」は必死に人間に擬態しているだけなのだ。眼の中には、白くて控えめなそばの花が揺れている。現代で生きづらいと思う人の眼の中にある花。

南京錠びかぴか春を脱出せよ

山本先生 東京都

朗らかな世界観が伺える。子供がかけられるような小さなぴかぴかの南京錠。「春」の中でも幸せに生きることにはできる。だが、その先はもっと広い。結句の命令形は、あたたかく背中を押す心。『ひみつの花園』のように、飛び出して行ってほしい。

神保町が

からだのなかにあったなら

もつとよい羽布団をかぶる

汐見りら 東京都

本が好きな主体だ。読書家の本への愛情は深い。本とともに育ち、本に支えられ生きてきた。自分の体のみならば、雑に扱っても大丈夫、という（ある種の自尊心の低さとも伺える）大らかさがあるが、自分を守り生きさせてくれた神保町は大切にしたい。自分よりも。

プリンパフェの完璧な造形を見よ

ここから先に無意識がある

雲理そら 大阪府

「完璧」を体得するまで、果てしない時間と鍛錬が必要だ。そこまで至り、やっと「無の境地」に入れる。この作品の表現だと、パティシエ目線よりプリン目線のように、プリンの無の境地とは……?という面白みがファンタジー要素を滲ませてくる。ふるえ方や艶だろうか。

言葉を忘れてみれば

遠近法は

もう無意味で

きみはここに

樋口 九亥 東京都

言葉で表すことのできる関係など、あつてないようなものだ。言葉を手放して、初めて「きみ」は見えてくる。おそらく別れた相手であろうきみに対し、あらゆる言葉を尽くして忘れたり納得しようとした。だが時間も距離も全く無意味だ、心の中にいる限り。

いつか爪になる感情を

かかえて眠る冬瓜

波津 ゆみ 神奈川県

爪になるまでは体内に揺蕩う。いつ頃から爪への方向性が決まるのだろう。爪のように硬質な感情なのか、硬化するエネルギーを蓄えるための柔らかいそれか。良いか悪いかさえも分からない。本人も分類できない感情こそ爪になりやすいのではないか、と感じる。

堤防を歩く風光っていても

春蜜柑 群馬県

生きる以外、道がない。私たちのいる世界はそうにできている。通学路に堤防があるのだろうか。どのような日でもそこを歩く。風が光って感じるのは、美しいことのように思えるが、「光っていても（歩かねばならない）」主体の心は、今孤独や苦しさに満ちていて、美しいものが痛いのだ。それでも、行かねばならない。

話したくなったら話して

サボテンの呼吸に合わせて

あげる水やり

葉月ままこ 福岡県

優しさにはあらゆる種類がある。他者の心の状態に合わせた優しさは、本人のしたいものとはペースが違うときはままある。「待つ」とは一番難しい優しさだ。自分のしてあげたものの（得られる快樂）がない。サボテンの呼吸といえば、細くゆるく、長い時間をかけて行われる。待つことに意識を集中させている。

ライカどくだみを見て

ライカ目をつむるようにあらゆる

さいわいを

ちねんひなた 沖縄県

カメラを我が子のように愛でる。どくだみを映すのではなく、「見て」、シャッターをきるのではなく「目をつむるように」。ボディに触れながら、ライカの魂を撫でている。あらゆる幸いをこの子に見せてあげたい。まとまりのない言葉も、心の中で語りかけているようだ。